【論　　文】

関ヶ原の戦いの布陣図に関する考察

白　峰　　旬

【要　　旨】

関ヶ原の戦い（慶長５年９月15日）の布陣図に関しては、参謀本部編纂『日本戦史　関原役（附表・附図）』（初版は明治26年刊行）収載の「關原本戰之圖」が著名であり、これまで関ヶ原の戦い関係の書籍などに掲載された関ヶ原の戦いの布陣図は、この図を踏襲し、そのままトレースした図か、或いは、一部修正した図が使用されてきた。このように、今日まで少しも史料批判されることがないまま関係書籍などに無批判に引用されてきた現状を再検討するため、問題点の考察をおこなった。

【キーワード】

関ヶ原の戦い、布陣図、参謀本部編纂『日本戦史　関原役』、明治時代、諸将の布陣位置

はじめに

慶長５年（1600）９月15日におこった関ヶ原の戦いの布陣図に関しては、参謀本部編纂『日本戦史　関原役（附表・附図）』（初版は明治26年〔1893〕刊行）収載の「關原本戰之圖」[(1)]（以下、参謀本部図と略称する。参謀本部図については図１参照。参謀本部図に記載された徳川家康方の部将名については表１参照）が著名であり、これまで関ヶ原の戦い関係の書籍などに掲載された関ヶ原の戦いの布陣図は、参謀本部図を踏襲し、そのままトレースした図か、或いは、一部修正した図が使用されてきたものがほとんどである[(2)]。このように、今日まで参謀本部図について、少しも史料批判されることがないまま関係書籍などに無批判に引用されてきた。

しかし、後述のように、参謀本部図は、参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』[(3)]における慶長５年９月15日当日の戦況に関する本文の記載内容と矛盾する箇所があるほか、参謀本部図の記載内容自体にも疑問点が多々ある。参謀本部図の記載内容に史料批判を加

える場合、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図との比較検討が必要不可欠である。よって、本稿では、①参謀本部図の記載内容に対する史料批判、②江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの各種の布陣図の内容検討と参謀本部図との比較検討、などの考察を中心におこなうこととする。

１．参謀本部図の記載内容に対する史料批判

上述のように、参謀本部図は現在非常に著名になっているため、関ヶ原の戦い関係の書籍で示される布陣図は参謀本部図をほぼ踏襲したものであり、金科玉条のごとくに墨守されてきたと言っても過言ではない。

しかし、参謀本部図の内容には、特に家康方の軍勢の布陣に関して以下のような疑問点、及び、参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』の本文の記載内容との矛盾点が指摘できる。ちなみに、参謀本部図には「此図ハ慶長五年九月十五日午前八時前後東西両軍ノ位置ヲ示ス」という注記があり、戦闘開始時[4]の時間を基準にした両軍の布陣であることがわかる。

《参謀本部図の記載内容に関する疑問点》

①通説では井伊直政は福島正則隊の脇を抜け駆けしたことになっているが、参謀本部図では、福島正則と井伊直政・松平忠吉は距離的にかなり離れて布陣している。よって、参謀本部図では、松平忠吉・井伊直政は、筒井定次の横に位置しているが本来は福島正則の横に位置しなければならないはずである。

②参謀本部図では、藤堂高虎・京極高知の前に、藤堂高虎・京極高知の進路をふさぐように（妨害するように）福島正則が斜めに位置して布陣しているが、現実問題としてこのような布陣が可能かどうか疑問がある。

③参謀本部図では、福島正則が他の諸将から離れて単独で前方に飛び出して布陣している。これは福島正則が先鋒であったことを強調する狙いがあったのかも知れないが、後述するように、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図と比較すると、このように福島正則だけが単独で飛び出して布陣する陣形には違和感が感じられる。また、福島正則の布陣の陣形が極端に斜めになっている点にも疑問がある。これは、斜めの陣形で布陣している宇喜多秀家と正対させるためにこのように描いたと考えられるが、現実にこのような斜めの陣形で布陣することが可能であるのか疑問である。

④参謀本部図では、織田有楽の横に古田重勝が位置しているが、これは古田重然（古田織部）の間違いであると考えられる。古田重勝はこの時点では、家康方として居城の松坂城に籠城していたため関ヶ原の本戦には参戦していない。なお、参謀本部図を踏襲した関ヶ原の戦い関係書籍の布陣図では、現在でも古田重勝として間違えたまま引用されている。後述するように、古田重勝は、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図には一切出てこないので、参謀本部図独自の間違いであると考えられる。

⑤参謀本部図では、家康方の竹中重門の記載がないほか、家康方の中小の領主の軍勢であ

る寄合衆の個々の将士の名前の記載もないので（寄合衆で記載があるのは織田有楽のみである）、家康方の諸将の名前を網羅しているわけではない。

⑥参謀本部図では、藤堂高虎・京極高知の後方に、寺沢広高が位置しているが、一次史料では寺沢広高の関ヶ原本戦への参戦は確認できない。

⑦参謀本部図では、家康本隊は「徳川家康麾下」として記されているのみで、家康本隊の徳川将士（旗本後備えの本多成重、大須賀忠政など）の名前は記されていない。つまり、参謀本部図には、徳川の部将名が井伊直政、本多忠勝、松平忠吉の３名以外に記載がなく、家康本隊の徳川将士名はわからない。

⑧参謀本部図では、金森長近・生駒一正・織田有楽・古田重勝（古田重勝は上述のように間違いなので古田重然と考えた場合）は、それぞれ中途半端な後方の位置に置かれているが、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図と比較した場合、このような位置に布陣するのは不自然である。

⑨参謀本部図では、筒井定次を田中吉政の横に置き、最前線に布陣したように描くが、筒井定次は堀尾忠氏とともに、家康の岡山本陣（勝山本陣）の留守を守ったとする史料（『関ヶ原御合戦物語』[5]）や江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図（『武家事紀』収載の布陣図[6]）もあり、筒井定次が最前線で戦ったことは確定できない。

⑩参謀本部図では、本多忠勝は味方の家康方諸将からやや離れて、単独で斜めに位置して布陣している。本多忠勝が斜めに位置して布陣している向きは、敵対する石田三成などの諸将に対する向きではなく、かなり離れた松尾山に布陣している小早川秀秋の方を向いている。このように本多忠勝が単独で味方の諸将とは別の向きに向かって布陣したとは考え難い。

《参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』[7]の本文の記載内容（以下では筆者〔白峰〕が現代語訳をおこなった）と参謀本部図との矛盾点》

⑪「松平忠吉と井伊直政は、その騎士30人を率いて次を越えて進み、福島隊の側に出た。（中略）駆けて宇喜多の隊に向かって戦端を開いた」（206頁）、「先に松平忠吉・井伊直政が挺進して開戦するや（中略）福島の隊と共に大いに宇喜多の隊を攻撃した」（208頁）と記されているので、松平忠吉と井伊直政は、福島隊に近接して位置しているはずである。なおかつ、松平忠吉と井伊直政は、宇喜多隊の近距離にも位置しているはずである。しかし、参謀本部図では、松平忠吉と井伊直政は、福島隊及び宇喜多隊から遠く離れて位置しているので、この点は矛盾している。

⑫「藤堂・京極の二隊は進んで大谷の隊を攻撃した」（206頁）と記されているが、参謀本部図には、藤堂・京極の二隊の前に、その進路をふさぐように福島正則隊が位置しており、藤堂・京極の二隊が開戦後すぐに大谷吉継隊と直接対戦できないようになっている。また、参謀本部図では、大谷吉継は石田三成方である木下頼継・戸田重政のさらに後方に位置しており、参謀本部図を見る限り、開戦直後に藤堂・京極の二隊と大谷吉継隊が直接対戦すると考えるのは無理がある。

⑬「織田父子（有楽・長孝）・古田重勝（重然ヵ）・猪子一時・佐久間兄弟（安政・勝之）・

船越景直の７将校(ママ)は小西の隊に向かって戦った」（206頁）と記されている。これらは寄合衆と言われる中小の領主であり、この中で参謀本部図に名前があるのは織田有楽と古田重勝だけであり、古田重勝は上述のように古田重然の間違いであると考えられる。参謀本部図では、石田三成方の軍勢と対戦する家康方の諸隊のうち、織田有楽と古田重勝(ママ)（重然ヵ）は家康隊を除くと最後尾に位置しており、小西隊からは最も離れているので、小西隊と開戦直後に対戦すると考えるのは無理がある。

⑭「田中・長岡（＝細川）・加藤・金森父子及び黒田・竹中の隊は石田の隊に向かって戦った」（206頁）と記されているが、参謀本部図には、竹中重門の位置は記されていない。

⑮「寺沢・戸川等の諸隊は進んで小西の隊を撃った」（208頁）と記されているが、参謀本部図には、戸川達安（寄合衆）の位置は記されていない。そして、参謀本部図では、寺沢広高は、藤堂高虎・京極高知の後方に位置しており、小西行長からはかなり離れているので、開戦直後に寺沢隊が小西隊と直接対戦できるとは考えられない。

⑯「大谷の前隊は、宇喜多の陣地に銃撃・吶喊(とっかん)の声が大いにおこるのを聞くと、関の藤川を越えて前進し、藤堂・京極・織田等の諸隊が攻撃してきたのを防御した」（209頁）と記されているが、参謀本部図では、織田有楽は、上述のように、家康隊を除くと最後尾に位置しており、大谷隊からは最も離れているので、大谷隊と開戦直後に対戦すると考えるのは無理がある。上述のように、『日本戦史　関原役（本編）』（206頁）では、開戦直後に織田有楽は小西隊と戦ったとしているのに、同書（209頁）では、開戦直後に織田隊は大谷隊と戦ったとしているので、『日本戦史　関原役（本編）』の本文の記載内容自体がそもそも矛盾していることになる。

以上のように、参謀本部図には、その記載内容に関する疑問点が指摘できるほか、参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』の本文の記載内容と参謀本部図との矛盾点も指摘できるので、これまでのように無批判に引用することは避けなければならない。

参謀本部図の成立事情をさぐるためには、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図との比較検討が必要であるが、その点については、本稿の「3. 参謀本部図と関ヶ原の戦いの布陣図との比較検討」において考察する。

２．江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図の内容検討

江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図について内容を考察するため、刊行本（史料）に収載された絵図３種、各関係機関に所蔵されている絵図27種を検討対象とした。具体的には、刊行本（史料）では、『高山公実録』[8]、『武家事紀』[9]、『武家事紀（津軽本）』[10]収載の各布陣図、各関係機関では、岡山大学附属図書館池田家文庫（以下、池田家文庫と略称する）、岐阜県図書館、大垣市立図書館、名古屋市蓬左文庫、西尾市岩瀬文庫、愛媛県立図書館伊予史談会文庫各所蔵の布陣図を検討対象とした。それらの絵図の摘要をまとめたものが表２である。なお、池田家文庫所蔵の図12種のうち、実際に披見したところ２種は絵図の表題とは異なり、関ヶ原の布陣図ではなかったため（１種は大坂陣図、１種は岐

阜攻城戦図)、検討対象からは除外した。

表２を見るとわかるように、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図は、家康方軍勢（諸将）が布陣した陣形の違いに着目すると、Ａ類（13種)、Ｂ類（10種)、その他（７種）というように３種類に大きく分類できる。以下では、それぞれ一つの系統の図としてとらえられるＡ類とＢ類の布陣図に関して、それぞれの特徴と信憑性について考察する。

【Ａ類の布陣図】

Ａ類の布陣図は、『高山公実録』収載の布陣図（「関原戦場圖」)[11]に代表されるものである（『高山公実録』収載の布陣図については図２参照。『高山公実録』収載の布陣図に記載された家康方部将名については表１参照)。『高山公実録』は藤堂高虎の伝記史料であり、幕末（嘉永３年〔1850〕～安政元年〔1854〕頃）に津藩の修史事業に関与した津藩士大野木直好、池田定礼等によって編纂されたものである[12]。

『高山公実録』収載の布陣図では、西は関ヶ原の戦場を中心に描き、東は大垣城と家康の岡山本陣（「岡山御本陣」）を中心に描いている。関ヶ原における家康方軍勢（諸将）の布陣に着目すると、進撃方向に向かって、左翼には藤堂高虎・京極高知・有馬豊氏・山内一豊が布陣し（以下、ａ－Ⅰグループと仮称する)、中央には福島正則と田中吉政が布陣している（以下、ａ－Ⅱグループと仮称する)。そして、右翼には黒田長政・竹中重門・加藤嘉明・金森長近・細川忠興・織田有楽（長益)・松倉重政が布陣し（以下、ｂグループと仮称する)、その後方には、本多忠勝・松平忠吉・井伊直政が布陣している（以下、ｃグループと仮称する)。そして、野上の横に「権現様御出陣」と記されていて、家康の本陣（桃配山）であることを示している。

『高山公実録』収載の布陣図では、ａ－Ⅰグループの上に「一」、ａ－Ⅱグループの上に「一」、ｂグループの上に「二」、ｃグループの上に「三」と記されている（Ａ類の布陣図では、このように、それぞれ「一」、「二」、「三」と記されている点が特徴であり、この特徴はＢ類の布陣図には見られない)。これはそれぞれ、一番備え（＝先鋒)、二番備え（＝第二陣)、三番備え（＝第三陣）を意味すると考えられ、戦闘序列を示すものである。

一番備えは、ａ－Ⅰグループとａ－Ⅱグループの２つに分かれているが、これは中山道を挟んで、進撃方向に向かって中山道の右がａ－Ⅱグループ、左がａ－Ⅰグループというように分かれていることによる。

『高山公実録』収載の布陣図において特に指摘できる点は、①通説では南宮山への押えにまわったとされる有馬豊氏と山内一豊が、先鋒としてａ－Ⅰグループに入っている（Ｂ類の布陣図、参謀本部図との相違点)、②田中吉政はｂグループではなく、ａ－Ⅱグループに入り、福島正則と並んで先鋒になっている(Ｂ類の布陣図、参謀本部図との相違点)、③筒井定次、生駒一正、蜂須賀至鎮、寺沢広高、古田重勝の記載はない（Ｂ類の布陣図には筒井定次、生駒一正、蜂須賀至鎮、寺沢広高の記載があり、参謀本部図には筒井定次、生駒一正、寺沢広高、古田重勝の記載がある)、④本多忠勝は松平忠吉、井伊直政と同じｃグループに入っている（Ｂ類の布陣図、参謀本部図との相違点)、⑤松平忠吉、井伊直政と福島正則は距離的にかなり離れている（Ｂ類の布陣図との相違点)、⑥福島正則が単

独で飛び出して先鋒として布陣しているわけではない（参謀本部図との相違点）、⑦細川忠興については「長岡越中守」と記されている（A類の布陣図では、細川忠興を「長岡越中守」と記すケースが多いことが特徴であり、この点はB類の布陣図とは異なる）、⑧a－Ⅰグループ（藤堂高虎・京極高知など）はa－Ⅱグループ（福島正則・田中吉政）よりも前方に位置している（B類の布陣図との相違点）、⑨福島正則は中山道より北の位置に布陣している（B類の布陣図では、中山道より南の位置に布陣している）、などの諸点である。

この『高山公実録』収載の布陣図の信憑性について考えると次のようになる。まず、上述のように、図中に「権現様御出陣」と記されているが、関ヶ原の戦い当時（慶長５年）に家康のことを「権現様」とは呼んでいなかったので、この図の作成が関ヶ原の戦い当時にリアルタイムで描かれた図でないことは明らかである。

そして、『高山公実録』収載の布陣図における、一番備え（a－Ⅰグループ・a－Ⅱグループ）、二番備え（bグループ）、三番備え（cグループ）の家康方諸将の名前と所属が、軍記物の『石田軍記』[13]における家康方諸将の布陣の記載（一番備え、二番備え、三番備え）と全く一致することから[14]、『石田軍記』の記載をもとに、『高山公実録』収載の布陣図が成立した可能性が考えられる。或いは、逆に『高山公実録』収載の布陣図と同種のA類の布陣図をもとに『石田軍記』の記載がされた、と考えることも可能である。

『石田軍記』の成立年は元禄11年（1698）であるのに対して、上述のように、『高山公実録』の成立年は、幕末の嘉永３年～安政元年頃であるので、両者の成立年からすると、『石田軍記』の記載をもとに『高山公実録』収載の布陣図が成立した可能性が考えられる。表２を見るとわかるように、A類の布陣図で成立年が明確なものは、上述した幕末（嘉永３年～安政元年頃）の『高山公実録』収載の布陣図を除くと、寛延２年（1749）（池田家文庫所蔵絵図、T12－４）、享保14年（1729）（池田家文庫所蔵絵図、T12－120）、享保５年（1720）（大垣市立図書館所蔵絵図、O－39－２－１）であるので、A類の布陣図で成立年が遡及できるのは享保５年までということになる。とすると、『石田軍記』の成立が年代的に先であり、A類の布陣図の方が年代的に後になるので、A類の布陣図をもとに『石田軍記』の記載がされたのではなく、『石田軍記』の記載内容をもとに、A類の布陣図（『高山公実録』収載の布陣図も含まれる）が成立したということになる。この点については、今後、A類の布陣図において、『石田軍記』の成立年である元禄11年よりも年代的に以前の絵図が発見されれば考え直す必要も出てくるが、とりあえず、今はこのように考えておきたい。

よって、軍記物である『石田軍記』の布陣に関する記載内容をもとにA類の布陣図が成立したと考えられるので、A類の布陣図の信憑性としては低いと言わざるを得ない。上述のように、本来先鋒に入るはずがない有馬豊氏と山内一豊が先鋒として入っている点や、松平忠吉、井伊直政と福島正則が距離的にかなり離れている点などは、A類の布陣図の信憑性が低いと見なすことの証左になるであろう。

A類の布陣図の中には、桃配山の家康の本陣に金扇の馬印をイラスト的に図示した布

陣図があり（池田家文庫所蔵絵図、T12－120、T12－27、名古屋市蓬左文庫所蔵絵図、８－119、図－354）、これは「扇の御馬印」（『改正三河後風土記』[15]）、「七本骨の扇の御認旗」（『関原軍記大成』[16]）という、後世の軍記物などにおける関ヶ原の戦い当日の記載と対応するので、こうした後世の軍記物などの記載内容をもとに、A 類の布陣図に描いたケースであると考えられる。

また、A 類の布陣図では、桃配山の家康の本陣の前に「小幡孫兵衛・中村与兵衛・小幡勘兵衛・脇五右衛門」の４人の名前を記している布陣図が多くあり（池田家文庫所蔵絵図、T12－４、T12－120、T12－19－３、T12－33、岐阜県図書館所蔵絵図、G／204.9／セ、名古屋市蓬左文庫所蔵絵図、８－119、図－354、図－356）、これらの名前は後世の軍記物などにおける関ヶ原の戦い当日の記載に出てくる。例えば、小幡勘兵衛は『武家事紀』[17]、『関原軍記大成』[18]、中村与兵衛は『武家事紀』[19]、『改正三河後風土記』[20]、脇五右衛門は『武家事紀』[21]、『関原軍記大成』[22]、『改正三河後風土記』[23]の関ヶ原の戦い当日の記載に名前が出てくるので、こうした後世の軍記物などの記載をもとに、A 類の布陣図に名前を記載したケースであると考えられる。

そのほか、A 類の布陣図の中には、桃配山の家康の本陣の前に「酒井左衛門尉、二度目ヲ此所ヨリ九町先へ御旗罷出也」（池田家文庫所蔵絵図、T12－120、など）、「酒井作右衛門、二度目、此所ヨリ九丁先エ御旗ヲ出」（池田家文庫所蔵絵図、T12－19－３、など）という記載がされている布陣図がある。これは、「其より九町程先へ酒井左衛門の旗を打立て、控へたり」（『石田軍記』[24]）とか「御旗本の先手を、酒井左衛門尉家次、十二本の御旗は、御本陣より九町計り御先に進み」（『関原軍記大成』[25]）という後世の軍記物における関ヶ原の戦い当日の記載内容と合致するので、こうした後世の軍記物の記載内容をもとに、A 類の布陣図に記載したケースであると考えられる。ちなみに、酒井家次（酒井左衛門尉）は実際には徳川秀忠に従って中山道を行軍していたので、関ヶ原の戦いには参戦しておらず、酒井家次が関ヶ原の戦い参戦したとするのは、軍記物（『関原軍記大成』[26]、『石田軍記』[27]）による創作である。上述のように、A 類の布陣図において、９町先へ旗を出したという記載は、その主語が酒井左衛門尉とするケースと、酒井作右衛門とするケースに分かれるが、上述のように酒井家次（酒井左衛門尉）は関ヶ原の戦いに参戦していないのに対して、酒井重勝（酒井作右衛門）は家康本隊の旗奉行であるので、酒井作右衛門とする方が正しいと考えられる。

以上のように、A 類の布陣図は、成立年が江戸時代中期の享保５年までしか遡及できず、記載内容についても後世の軍記物などの記載情報をそのまま布陣図に表現した箇所が多く、慶長５年のリアルタイムの布陣図ではなく、後世に作成された布陣図と評価せざるを得ないので、布陣図としての信憑性は低いと考えられる。

【B 類の布陣図】

B 類の布陣図は、『武家事紀』収載の布陣図（「関箇原役圖」）[28]に代表されるものである（『武家事紀』収載の布陣図については図３参照。『武家事紀』収載の布陣図に記載された家康方部将名については表１参照）。『武家事紀』は、江戸時代前期の軍学者として有名な

山鹿素行の著であり、延宝元年（1673）の序文がある[29]。よって、『武家事紀』は江戸時代前期の史料であり、上述したように、A類の布陣図を収載した『高山公実録』が幕末（嘉永３年～安政元年頃）の成立である点と比較すると、時代的にはかなり早い成立ということになる。そして、上述のように、A類の布陣図が、年代的に江戸時代中期の享保５年までしか遡及でないことに比べて、B類の布陣図は、『武家事紀』の成立年である延宝元年まで遡及できることになり、その点でもB類の布陣図の方が、A類の布陣図よりも時代的に早い成立であるということがわかる。ちなみに『武家事紀』には、上記の「関箇原役圖」のほかに、「関箇原役圖（津軽本）」が収載されているが[30]（図４参照）、この布陣図は、上記の分類上では、A類、B類のいずれにも入らず、その他の分類になる。

『武家事紀』収載の布陣図では、西は関ヶ原の戦場を中心に描き、東は大垣城と家康の岡山本陣（「勝山御本陣」）を中心に描いている。この描写範囲は、上述した『高山公実録』収載の布陣図と同様である。関ヶ原での家康方の軍勢（諸将）の布陣に着目すると、進撃方向に向かって、左翼には、本多忠勝が単独で布陣し、少し離れて中山道の南側に福島正則・京極高知・藤堂高虎・蜂須賀至鎮が布陣している（以下、本多忠勝を除くこのグループをｄグループと仮称する）。中山道の北側には松平忠吉・井伊直政が布陣している（以下、ｆグループと仮称する）。右翼として、北の山手には竹中重門・加藤貞泰・黒田長政が布陣し（以下、ｅ－Ⅰグループと仮称する）、少し離れて、金森長近・加藤嘉明・細川忠興・田中吉政が布陣している（以下、ｅ－Ⅱグループと仮称する）。野上村付近には、寺沢広高・山内一豊・有馬豊氏・生駒一正・織田有楽（長益）が布陣しているが（以下、ｇグループと仮称する）、この場所は家康の本陣（桃配山）の近くにあたり、最前線から見るとかなり後方に位置していることになる。近くの垂井町付近には、南宮山に布陣した毛利秀元などへの押えとして、池田輝政・池田長吉・浅野幸長が布陣している。かなり離れているが、赤坂にある家康の岡山本陣（勝山本陣）には御留守居として、堀尾忠氏・筒井定次が置かれている。

『武家事紀』収載の布陣図を見ると、石田三成方の軍勢は関ヶ原に展開する主力戦力のほか、南宮山に布陣した毛利秀元などの軍勢と大垣城に在城（籠城）した軍勢の３つに分けられる。これに対して家康方の軍勢は、関ヶ原において石田三成方の軍勢と対峙した主力戦力のほか、南宮山の押えとして布陣した軍勢、大垣城への寄せ手、家康の岡山本陣（勝山本陣）の留守居というように４つに分けられる。

『武家事紀』収載の布陣図において特に指摘できる点は、①本多忠勝が松平忠吉・井伊直政からかなり離れて単独で最左翼の位置に布陣している（A類の布陣図との相違点）、②有馬豊氏と山内一豊は先鋒ではなく、ｇグループに入り、最も後方に布陣している（A類の布陣図との相違点）、③蜂須賀至鎮は先鋒としてｄグループに入っている（蜂須賀至鎮はA類の布陣図や参謀本部図には記載がない）、④加藤貞泰は黒田長政がいるｅ－Ⅰグループに入っている（加藤貞泰はA類の布陣図や参謀本部図には記載がない）、⑤田中吉政は細川忠興の横に位置しており、福島正則からは離れた位置に布陣している（A類の布陣図との相違点）、⑥松平忠吉・井伊直政は後方に位置するのではなく、前線に布陣し

ており、井伊直政は福島正則と隣接した位置に布陣している（A 類の布陣図との相違点）、⑦黒田長政・竹中重門が布陣する位置（e－Ⅰグループ）と金森長近・加藤嘉明・細川忠興が布陣する位置（e－Ⅱグループ）は離れている（A 類の布陣図との相違点）、⑧寺沢広高は最も後方に布陣したｇグループに入っている（寺沢広高は A 類の布陣図には記載がなく、参謀本部図では藤堂高虎・京極高知のうしろに位置しており前線に布陣している）、⑨生駒一正は最も後方に布陣したｇグループに入っている（生駒一正は A 類の布陣図には記載がなく、参謀本部図では金森長近の横に位置している）、⑩織田有楽は最も後方に布陣したｇグループに入っている（織田有楽は A 類の布陣図では細川忠興の横に位置しており前線に布陣している）、⑪筒井定次と堀尾忠氏は、赤坂にある家康の岡山本陣（勝山本陣）の御留守居になっている（筒井定次は A 類の布陣図には記載がなく、参謀本部図では筒井定次を田中吉政の横に置き、最前線に布陣したように描いている。なお、B 類の布陣図は、すべて筒井定次と堀尾忠氏を勝山本陣の留守居としている）、⑫細川忠興については「細川越中守」と記されている（B 類の布陣図では、すべて細川忠興を「細川越中守」と記していることが特徴であり、この点は A 類の布陣図とは異なる）、⑬福島正則は中山道より南の位置に布陣している（A 類の布陣図では、中山道より北の位置に布陣している）、⑭大垣城に対する徳川方の寄せ手の軍勢の諸将の中に、津軽為信と西尾光教がいる（この２人は A 類の布陣図には記載がない）、などの諸点である。

『武家事紀』収載の布陣図の信憑性について考えると次のようになる。まず、福島正則の隣りに井伊直政が布陣している点は、通説で井伊直政が福島正則隊の脇を抜け駆けしたことになっている点と符合する。『武家事紀』収載の布陣図に記載されている家康方の諸将のうちで、竹中重門・加藤貞泰・寺沢広高・山内一豊・有馬豊氏・生駒一正・津軽為信は、『武家事紀』本文の９月15日における記載には出てこない。この点は、『武家事紀』収載の布陣図と『武家事紀』本文との整合性がとれていないことを示している。

本多忠勝は、『武家事紀』の本文では島津義弘・宇喜多秀家と戦ったとしているが、『武家事紀』収載の布陣図では、本多忠勝の布陣している位置から島津義弘・宇喜多秀家の布陣している位置は、距離的にかなり離れている。

蜂須賀至鎮の記載があるのは『武家事紀』収載の布陣図（B 類の布陣図）のみであり、A 類の布陣図や参謀本部図には記載がない。寺沢広高は A 類の布陣図には記載がない。この蜂須賀至鎮・寺沢広高については、岐阜城攻城戦では家康方諸将に関する一次史料に記載がないので[31]、その後の関ヶ原の戦い（本戦）に本当に参戦したのかどうか一次史料では確認できない。蜂須賀至鎮は慶長５年の時点で、まだ15才であり、わずか18騎で参戦した、とする見解があるが[32]、18騎の参戦では家康方の実質的な戦力にはならなかったであろう。A 類の布陣図や参謀本部図に蜂須賀至鎮の記載がないのはそのような理由によるものかもしれない。逆に、『武家事紀』収載の布陣図（B 類の布陣図）にだけ蜂須賀至鎮の記載があることは、『武家事紀』収載の布陣図（B 類の布陣図）の信憑性が低いことを示すものと言えよう。

筒井定次は A 類の布陣図には記載がなく、参謀本部図では前線の位置に布陣している

が、『武家事紀』収載の布陣図（B類の布陣図）では、家康の岡山本陣（勝山本陣）の留守居として堀尾忠氏と共に記載されている。筒井定次については、岐阜城攻城戦では家康方諸将に関する一次史料に記載があるので[33]、その後の関ヶ原の戦い（本戦）に参戦した可能性は高いが、前線で戦ったのか、或いは、家康の岡山本陣（勝山本陣）の留守居として後方に待機したのか、という点についてはいずれとも確定し難い。ただし、『武家事紀』の本文中では、「胴筋ヨリ黒田長政・長岡忠興・加藤喜（ママ）（嘉ヵ）明・筒井定次・金森父子、平カヽリ也」[34]と記されていて、黒田長政・細川忠興などと共に、筒井定次は前線で戦ったとしているので、その点では、『武家事紀』収載の布陣図と、『武家事紀』の本文中の記載内容が矛盾していることになる。

前線において、黒田長政の横の位置に加藤貞泰を記載するのは、『武家事紀』収載の布陣図(B類の布陣図)のみであり、A類の布陣図や参謀本部図には加藤貞泰の記載はない。加藤貞泰が関ヶ原の戦いにおいて前線で戦ったのか、或いは、後方に待機したのか、という点は、江戸時代における伊予大洲藩（加藤家）の関係史料でも見解が分かれており、『北藤録』[35]は加藤貞泰が前線で戦ったとしているのに対して、『大洲秘録』[36]は、家康の命により大垣城への押えとして美濃国本田（ほんでん）（現岐阜県瑞穂市本田）に在陣した、としている。よって、この点についてはいずれとも確定し難い。

また、『武家事紀』収載の布陣図には、蜂須賀至鎮について「蜂須賀阿波守」と記されているが（B類の布陣図では、すべて蜂須賀至鎮を「蜂須賀阿波守」と記していることが特徴である)、蜂須賀至鎮が阿波守に叙任するのは慶長９年（1604）であり[37]、この点から慶長５年のリアルタイムの布陣図ではないことがわかる。

『武家事紀』収載の布陣図には、細川忠興について「細川越中守」と記されているが（B類の布陣図では、すべて細川忠興を「細川越中守」と記していることが特徴であり、この点はA類の布陣図とは異なる)、慶長５年当時の忠興の名字は「長岡」或いは「羽柴」であり、「細川」になるのは元和期以降であるので[38]、この点から慶長５年のリアルタイムの布陣図ではないことがわかる。

このような諸点について勘案すると、井伊直政が布陣する位置について一定の信憑性はあるものの、蜂須賀至鎮・寺沢広高のように関ヶ原の戦いへの参戦が一次史料で確定できない名前が記載されていたり、筒井定次に関して、『武家事紀』本文の記載内容と『武家事紀』収載の布陣図との矛盾があるなど、『武家事紀』収載の布陣図について信憑性が低いことを示す点もあり、こうした点は史料批判の余地があると考えられる。

そして、『武家事紀』収載の布陣図に記された蜂須賀至鎮の受領名が慶長５年当時のものでないことや、細川忠興の名字が慶長５年当時のものでないことから、B類の布陣図も慶長５年のリアルタイムの布陣図ではないと考えられ、その記載内容について検討の余地が残されていると言えよう。

なお、生駒一正・蜂須賀至鎮・寺沢広高・加藤貞泰について、『武家事紀』収載の布陣図（B類の布陣図）には記載されているが、『高山公実録』収載の布陣図（A類の布陣図）には全く記載されていない点は対照的であり、その相違がどのような理由に起因するのか

を今後考える必要があるだろう。

『武家事紀』収載の布陣図の特徴として、石田三成が布陣する場所の前に二重の柵が描かれている点が注意を引く。これは『武家事紀』の本文に「石田三成ハ小関村北山ノ尾ニ付テ陳（ママ）（陣ヵ）ヲハル（中略）長篠ノ例トナリテ陳（ママ）（陣ヵ）ノ前ニヨイヨリ柵ヲ二重カマエシム」[39]と記されていることを布陣図に描写したものと考えられる。

江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図には、A類、B類、その他、の区分を問わず、石田三成の布陣する場所の前に柵（一重あるいは二重）が描かれている。これは、B類の布陣図で年代が遡及できるのは『武家事紀』の成立年である延宝元年であることと、上述のように、A類の布陣図とB類の布陣図の成立年の初見を比較した場合、A類の布陣図はB類の布陣図よりも年代的にあとになることを勘案すると（その他の分類の布陣図では成立年がわかるものはない）、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図の初見は『武家事紀』収載の布陣図であり（つまり、『武家事紀』収載の布陣図が最初の布陣図ということ）、それ以降の布陣図はすべてこの『武家事紀』収載の布陣図の影響を受けて、石田三成の布陣する場所の前に柵を描くようになった、と推測できる。

【小括】

以上のように、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図には、A類（『高山公実録』収載の布陣図など）とB類（『武家事紀』収載の布陣図など）という２つの系統の布陣図が存在し、それぞれの成立年の初見を比較すると、A類の布陣図が江戸時代中期の享保５年、B類の布陣図が江戸時代前期の延宝元年であり、B類の布陣図の方がA類の布陣図よりも年代的に早く成立したことがわかる。そして、その記載内容を検討すると、B類の布陣図に比較して、A類の布陣図はいろいろな軍記物などの記載情報が図中に反映していることがわかる。その理由は、上述のようにB類の布陣図よりもA類の布陣図の方が成立年が遅かった点に起因するものと考えられる。

A類の布陣図とB類の布陣図、及び、その他の分類の布陣図の絵図の大きさについて、絵図の面積をもとにソートをかけたものが表３である（刊行本〔史料〕に収載された布陣図３種は除く）。表３を見るとわかるように、１例を除くと、A類の布陣図の方がB類の布陣図よりも大きいことがわかる。A類の布陣図は１例を除くと、長辺、短辺ともに100cm以上であり、長辺が200cm以上の絵図が２例、長辺が150cm以上200cm未満の絵図が８例ある。これに対してB類の布陣図は、１例を除くと、長辺、短辺ともに100cm未満である。

上述のように、B類の布陣図の方がA類の布陣図よりも年代的に早く成立した点を考慮すると、江戸時代前期において小さいB類の布陣図がまず流布し、その後、江戸時代中期になって大きいA類の布陣図が流布した、と考えられる。上述のように、A類の布陣図では、桃配山の家康の本陣に金扇の馬印をイラスト的に図示したり、桃配山の家康の本陣の前に家康の家臣名を複数記すなど、軍記物などの記載情報を取り入れて絵図の内容が詳細かつ豪華になったことも、A類の布陣図が大きい点と関係していると考えられる。

江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図の中には、大垣市立図書館所蔵絵図（O－

39－２－１）のように、絵図の対角線上の中心点に（つまり絵図の真ん中に）家康の岡山本陣（勝山本陣）を過大にデフォルメして描いている布陣図（この絵図はＡ類の布陣図に該当する）もある。この布陣図において、こうした描き方をした意図は、家康の事蹟を大きく顕彰するためであったことは明らかである。

江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図（Ａ類及びＢ類の布陣図）が、関ヶ原の戦いがおこった時点でリアルタイムに描かれたものではないことは上述したが、桃配山の家康陣所を「権現様御本陣」（池田家文庫所蔵絵図、T12－120）、「権現様陣所」（名古屋市蓬左文庫所蔵絵図、図－356）と記している布陣図（いずれの絵図もＡ類の布陣図に該当する）がある点からもそのことがわかる。つまり、「権現様」とは東照大権現のことを指し、東照大権現とは元和３年（1617）（家康死去の翌年）に朝廷から授与された家康の神号であるから、こうした布陣図は、この年以降のものであることになる。

よって、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図は、江戸時代になって徳川幕府による支配体制下において、あくまで徳川方の視点から戦勝記念的感覚で描かれたものである、という点には注意が必要であろう。

３．参謀本部図と関ヶ原の戦いの布陣図との比較検討

参謀本部図と江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図を比較して、まずわかることは描かれた範囲が異なる点である。

参謀本部図は、東西方向に俯瞰すると、西は関ヶ原の主戦場から、東は南宮山・栗原山あたりまでを描いている。これに対して、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図は、東西方向に俯瞰すると、西は関ヶ原の主戦場から、東は家康の岡山本陣（勝山本陣）と大垣城あたりまで描く布陣図（『高山公実録』収載の布陣図、『武家事紀』収載の布陣図など）や、岐阜城、犬山城あたりまで描く布陣図（池田家文庫所蔵絵図、T12－４、T12－120など）もある。岐阜城、犬山城あたりまで描く布陣図は、関ヶ原の戦い以前の岐阜城攻城戦・犬山城明け渡しなどが、家康方にとって関係する一連の軍事行動であったと認識されていたことを示すものであろう。その意味では、関ヶ原の戦いのみに意義があるのではなく、岐阜城攻城戦なども含めて一連の軍事作戦をトータルにとらえる認識を示していて興味深い。この点は、現代の視点において、関ヶ原の戦いのみがクローズアップされるのとは大きく異なっている。このように考えると、参謀本部図において、関ヶ原の主戦場から南宮山・栗原山あたりまでしか描かないのは、すでに視点として近代的な発想に基づいたものであることがわかる。

参謀本部図は、関ヶ原の主戦場から南宮山・栗原山あたりまでしか描かれていない点は上述したが、それでは、参謀本部図は、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図をもとに成立したのかどうか、という問題を考えたい。一見すると、参謀本部図は、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図の中の関ヶ原の主戦場から南宮山・栗原山あたりまでをトリミングして描かれたように見えるが、管見の限り、家康方の軍勢の布陣について、参謀

本部図と江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図を比較した場合、家康方諸将の布陣位置が完全に一致するものは一例もない。

このことは、参謀本部図が、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図をもとに（＝下敷きにして、或いは、トレースして）成立したのではなく、参謀本部編纂『日本戦史　関原役（附表・附図）』[40]が刊行された明治26年の時点で参謀本部が独自に作成したオリジナルの布陣図である、ということになる。

参謀本部図について、その記載内容に関する疑問点や、参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』[41]の本文の記載内容との矛盾点は上述したが、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図と比較した場合、奇異に思えるのは、その布陣位置の不自然さである。

参謀本部図では、福島正則が後続の藤堂高虎・京極高知からかなり離れて単独で飛び出して斜めの形で布陣している。しかし、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図を見ると、諸将はバラバラに布陣するのではなく、複数の部将が各グループとしてそれぞれ「備え」を構成して、それぞれ集団で規則的に布陣する形をとっていることがわかる。これは江戸時代になっているとはいえ、合戦において布陣する陣形についての常識が残っていたと考えられることから、参謀本部図のような福島正則の布陣位置は江戸時代の布陣図の常識では考えられない、ということになる。

また、参謀本部図では、石田三成方の宇喜多秀家・小西行長などが地形に沿って全体に斜めの形で布陣しているが、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図では、このように石田三成方の諸将を全体に斜めの形で布陣したように描く布陣図は一部の例外を除いて存在しない。江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図では、原則として石田三成方の諸将と家康方の諸将が正対する形で向き合っており、このことも江戸時代の布陣図の常識では考えられない点ということになる。そもそも現実問題として、参謀本部図に描かれているような、石田三成方の軍勢が全体に斜めの形で布陣することが可能であるとは考えられない。

このような点を考慮すると、参謀本部図は前近代における合戦の常識を踏まえていない、近代（明治時代）に入ってからの参謀本部による創作（フィクション）と断定せざるを得ない。つまり、参謀本部図は、諸将の布陣位置について、江戸時代の布陣図に見られるような規則正しい陣形になっていないことから、江戸時代の陣形のセオリーを無視した明治時代の創作の要素が強いということになる。

上述のように、参謀本部図と江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図を比較した場合、諸将の布陣位置が完全に一致するものはないことから、参謀本部図における諸将の布陣が、文献史料をもとに比定されたのか否かを考えたい。周知のように、関ヶ原の戦いがあった時点での一次史料（家康や諸将が発給した書状など）において、諸将の布陣位置を詳しく記載した史料はないので、参謀本部図が文献史料を参考に作成されたとすると、江戸時代の軍記物などに依拠したと考えられる。

江戸時代の軍記物などの二次史料（編纂史料）において、諸将の布陣の構成を記したものには、『庵主物語』（延宝２年〔1674〕成立）[42]、『黒田家譜』（元禄元年〔1688〕成立）[43]、

『石田軍記』（元禄11年成立）[44]、『関ヶ原御合戦物語』（宝永３年〔1706〕成立）[45]、『関原軍記大成』（正徳３年〔1713〕成立）[46]、『大垣藩地方雑記』（弘化元年〔1844〕）[47]がある。その点に関して、それぞれの記載内容をまとめたものが表４である。表４を見るとわかるように、『関ヶ原御合戦物語』を除いて、『庵主物語』、『黒田家譜』、『石田軍記』、『大垣藩地方雑記』は、石田三成方の軍勢と対峙した家康方の軍勢の構成は基本的に三軍構成であり、『関原軍記大成』は四軍構成である。『黒田家譜』は右軍・左軍・中軍、『庵主物語』、『石田軍記』、『大垣藩地方雑記』は一番備え・二番備え・三番備え、『関原軍記大成』は一番・二番・三番・遊軍という基本構成である。

『石田軍記』の布陣の構成が、上記のＡ類の布陣図と一致することは上述したが、参謀本部図と諸将の構成がある程度一致するのは『黒田家譜』である。

参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』の本文の記載には、家康方の軍勢の構成において、一番備え・二番備え・三番備えという呼称は使用されておらず、中山道を西上して進撃する過程で「其先頭二縦隊ト為リ、左ハ福島正則、右ハ黒田長政ノ隊ナリ」[48]、と記されていて、軍勢を左右で区分している。この点は、『黒田家譜』の右軍・左軍という区分と共通している。参謀本部図では、家康方の軍勢の構成において、最左翼に福島正則、最右翼に黒田長政が布陣しており、この点は、上述した参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』の本文の記載内容[49]と関連しているように考えられる。参謀本部図では、家康方の軍勢の中央に松平忠吉・井伊直政が布陣しており、この点は、『黒田家譜』において松平忠吉・井伊直政を中軍としていることと共通している。

『黒田家譜』の記載内容からは、家康方の諸将が布陣した位置までは正確にわからないが、三軍構成（右軍・左軍・中軍）における諸将の区分が参謀本部図とある程度一致することは、上述のように指摘できる。よって、参謀本部図の作成において、『黒田家譜』を参考資料の１つにした可能性は考えられる。

おわりに

以上のように、関ヶ原の戦いの布陣図に関して、今日多くの関係書籍等に引用されている布陣図の基本となっている参謀本部図は、明治時代になって参謀本部が創作したフィクションの布陣図であることがわかった。よって、参謀本部図は、これまで史料批判をせずに長年にわたりたびたび引用されてきたが、今後はこうした無批判な引用は避けるべきであろう。

このように、参謀本部図が、これまで無批判に引用されてきた背景には、江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図の記載内容を十分研究・調査して参謀本部図との比較検討をしてこなかったことも一因と考えられる。その意味では、本稿での考察によって江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図にはＡ類とＢ類の２つの系統があるとわかったことや、参謀本部図が江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図をトレースしたものではなく、参謀本部が明治時代に独自に作成したオリジナルの布陣図であるということがわかった点は

意義が大きいと考えられる。

そのうえで、参謀本部図は、諸将の布陣位置について、江戸時代の布陣図に見られるような規則正しい陣形になっておらず、江戸時代の陣形のセオリーを無視した明治時代の創作の要素が強いことがわかった。このことは、本稿において参謀本部図と江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図を比較研究してはじめて結論付けられた点である。

本稿の考察によって参謀本部図の記載内容に問題点が多いことがわかった点を踏まえれば、今後は参謀本部図を無批判に引用することを避け、一次史料（文献史料）の記載内容にも注意を払う必要があると考えられる。

例えば、一次史料である「（慶長５年）９月17日付松平家乗宛石川康通・彦坂元正連署状写」[50]には、「井兵少又福嶋殿、為先手其外悉打続、敵切所を抱有所へ指懸、とりむすひ候刻」（井伊直政・福島正則が先手となり、そのほか〔の諸将が〕すべて次々と続き、敵が切所を守っているところへ出陣して、戦いをまじえた時）と記されている。この書状は関ヶ原の戦いの２日後に報じたものであり、この記載には信憑性があると考えられる。この記載によれば、井伊直政と福島正則が先手であり、その他の諸将が次々と続いた、としているので、家康方の陣形としては、井伊直政と福島正則が先手として出陣し、それに他の諸将が続いたことになる。

その意味では、福島正則から井伊直政を離して後方に置く参謀本部図やＡ類の布陣図には信憑性がないことになる。Ｂ類の布陣図では、井伊直政と福島正則を隣接する位置に置く布陣図もあるので、その点では一定の信憑性はある。ただし、Ｂ類の布陣図では、井伊直政の横に松平忠吉が位置しているが、前掲「（慶長５年）９月17日付松平家乗宛石川康通・彦坂元正連署状写」では、松平忠吉について言及がないので、開戦の時点で、松平忠吉が先手として井伊直政の横に位置していたかどうか、という点は今後検証が必要であろう。

また、「吉川広家自筆書状案（慶長５年９月17日）」[51]には、①山中（現関ヶ原町山中）への先手は、福島正則・黒田長政、そのほか加藤嘉明・藤堂高虎（など）上（方）より（東国へ）下った衆中である、②南宮山への手当て（＝配置した諸将）は、先手の池田輝政・井伊直政・本多忠勝・田中吉政・堀尾忠氏、そのほか家康の馬廻である、と記されている。この記載内容からは、福島正則・黒田長政・加藤嘉明・藤堂高虎が石田三成方の軍勢と戦った先手の諸将であったことがわかる。南宮山（毛利秀元などが布陣）への押えとして配置された諸将の中で井伊直政・本多忠勝・田中吉政については、開戦までに南宮山への押えから前線へ移動したと考えられる。

このような一次史料による検証作業のほか、今後の課題として、編纂史料（二次史料）である江戸時代の軍記物での本戦（９月15日）の戦闘描写における部将名や、布陣構成・布陣位置の記載内容に対する史料批判、つまり具体的には、軍記物に記載された個々の部将が本当に本戦に参戦したのかどうかという点の批判的検討や、軍記物に記載されたそれぞれの部将の布陣構成・布陣位置が正しいのかどうかという点の批判的検討などをおこなう必要が出てくるであろう。こうした課題点の検討・考察については他日を期したい。

［註］

（1）参謀本部編纂『日本戦史　関原役』〈日本戦史編纂委員撰〉（版権所有参謀本部、長尾景弼印刷兼発売者・博聞社印刷兼発売所、1894年〔明治27年〕、再版）は、「本編」、「文書」、「補伝」、「附表・附図」の４分冊である。同書の奥付によれば初版は1893年（明治26年）である。今日よく知られている関ヶ原の戦いの布陣図は「關原本戰之圖」という題名で、前掲・参謀本部編纂『日本戦史　関原役（附表・附図）』に収載されている。前掲・参謀本部編纂『日本戦史　関原役（附表・附図）』に収載されている「關原本戰之圖」は『歴史群像』2011年２月号（学研パブリッシング発行、2011年）の付録としてカラーで復刻された。

（2）代表的な事例として、笠谷和比古『関ヶ原合戦－家康の戦略と幕藩体制』（講談社、1994年、130～131頁）、小和田哲男『関ヶ原から大坂の陣へ』（新人物往来社、1999年、134～135頁）、笠谷和比古『関ヶ原合戦と大坂の陣』（吉川弘文館、2007年、118～119頁）などがある。

（3）参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』の本文の記載内容について、本稿では、参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』〈日本戦史編纂委員撰〉（版権所有参謀本部、元眞社発行、1911年、三版）と、それを現代語訳した旧参謀本部編纂『関ヶ原の役』〈日本の戦史〉（徳間書店、2009年）をもとに検討した。

（4）前掲・旧参謀本部編纂『関ヶ原の役』（214頁）には、午前８時頃、福島正則隊が宇喜多隊を射撃した、と記載されている。

（5）大垣市立図書館所蔵『関ヶ原御合戦物語』。

（6）山鹿素行著『武家事紀』中巻（原書房、1982年復刻、原本は山鹿素行先生全集刊行会が編纂兼発行者として1916年に発行、417頁）。

（7）前掲・参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』。

（8）上野市古文献刊行会編『高山公実録』〈藤堂高虎公伝〉上巻（清文堂出版、1998年、220～221頁）。

（9）前掲『武家事紀』中巻（417頁）。

（10）前掲『武家事紀』中巻（418頁）。

（11）前掲『高山公実録』上巻（220～221頁）。

（12）上野市古文献刊行会編『公室年譜略－藤堂藩初期史料－』（清文堂出版、2002年、解説994頁）。『高山公実録』の編纂者、成立年に関するこの見解は、太田光俊氏の研究成果によるものである。

（13）『石田軍記』〈国史叢書〉（国史研究会発行、1914年、240～241頁）。『石田軍記』における家康方諸将については表４参照。

（14）ちなみに、細川忠興について「長岡越中守」と表記する点は、『高山公実録』収載の布陣図と『石田軍記』の記載では一致する。また、伊吹山について、『高山公実録』収載の布陣図では「膽吹山」と表記し、『石田軍記』では「膽吹」と表記しているので、この点も一致すると考えてよい。

（15）桑田忠親監修・宇田川武久校注『改正三河後風土記（下）』（秋田書店、1977年、329頁）。

（16）宮川尚古著『関原軍記大成（三）』〈国史叢書〉（国史研究会発行、1916年、99頁）。

（17）前掲『武家事紀』中巻（240頁）。

（18）前掲『関原軍記大成（三）』（117頁）。

（19）前掲『武家事紀』中巻（240頁）。

(20) 前掲『改正三河後風土記（下)』(334頁)。

(21) 前掲『武家事紀』中巻（240頁)。

(22) 前掲『関原軍記大成（三)』(118頁)。

(23) 前掲『改正三河後風土記（下)』(334頁)。

(24) 前掲『石田軍記』(240頁)。

(25) 前掲『関原軍記大成（三)』(99頁)。

(26) 前掲『関原軍記大成（三)』。

(27) 前掲『石田軍記』。

(28) 前掲『武家事紀』中巻（417頁)。

(29) 山鹿素行著『武家事紀』上巻（原書房、1982年復刻〔原本は1915年発行〕)。

(30) 前掲『武家事紀』中巻（418頁)。

(31) 拙稿「慶長５年６月～同年９月における徳川家康の軍事行動について（その３)」(『史学論叢』42号、別府大学史学研究会、2012年）の表７参照。

(32) 図録『決戦関ヶ原－武将たちの闘い－』（徳島市立徳島城博物館、2002年、62、76、77頁。いずれの頁も執筆は根津寿夫氏)。

(33) 前掲・拙稿「慶長５年６月～同年９月における徳川家康の軍事行動について（その３)」の表７参照。

(34) 前掲『武家事紀』中巻（239頁)。

(35) 加藤泰衛編『北藤録』〈伊予史談会双書第６集〉(伊予史談会編集・発行、1982年、66頁)。

(36) 伊予史談会編『大洲秘録』〈伊予史談会双書第７集〉(伊予史談会編集・発行、1983年、32頁)。

(37)『新訂寛政重修諸家譜』第６（続群書類従完成会、1964年、242頁、蜂須賀至鎮の項)。

(38) 和田裕弘「細川ガラシャってだれ？－藤孝・忠興父子の苗字をめぐって－」(http://nobunagagaku.com/cn16/essay03_04. html)。『新訂寛政重修諸家譜』第２（続群書類従完成会、1964年、307頁、細川忠興の項）には「(元和元年）十二月二十四日駿府にいたりて拝謁す。(中略）おほせにより羽柴を改めて細川に復す。」と記されているので、元和元年12月24日、細川忠興が駿府において家康に拝謁した際に、家康の命によって「羽柴」から「細川」に復したことがわかる。細川忠興について、「(慶長５年）７月晦日付真田昌幸宛石田三成書状」(『真田家文書』上巻、米山一政編輯、長野市発行、1981年、51号文書）には「長岡越中」、「(慶長５年）８月25日付長束正家・増田長盛・石田三成・前田玄以・毛利輝元・宇喜多秀家宛上杉景勝書状」（前掲『真田家文書』上巻、59号文書）には「羽柴越中」、「(慶長５年）８月12日付徳川家康書状」(中村孝也著『徳川家康文書の研究』中巻、日本学術振興会、1959年、571頁）の宛所（宛名）には「丹後宰相殿」と、それぞれ記されている。よって、慶長５年７月～同年８月当時、忠興の名字は「長岡」或いは「羽柴」であって、「細川」ではなかったことがわかる。

(39) 前掲『武家事紀』中巻（238頁)。

(40) 前掲・参謀本部編纂『日本戦史　関原役（附表・附図)』。

(41) 前掲・参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編)』。

(42)「庵主物語」(藤井治左衛門編『関ヶ原合戦史料集』、新人物往来社、1979年、393～394頁)。

(43) 貝原益軒編著『黒田家譜』(歴史図書社、1980年、311～312頁)。

(44) 前掲『石田軍記』(240～241、243、245頁)。

(45) 前掲・大垣市立図書館所蔵『関ヶ原御合戦物語』。

(46) 前掲『関原軍記大成（三）』(93～96頁)。

(47)「大垣藩地方雑記」(前掲『関ヶ原合戦史料集』、392～393頁)。

(48) 前掲・参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』(204頁)。

(49) 前掲・参謀本部編纂『日本戦史　関原役（本編）』(204頁)。

(50)「(慶長５年) ９月17日付松平家乗宛石川康通・彦坂元正連署状写」(『新修福岡市史』資料編、中世１、市内所在文書、福岡市史編集委員会編集、福岡市発行、2010年、177～178頁)。

(51)『大日本古文書』〈吉川家文書之二〉(東京大学史料編纂所編纂、財団法人東京大学出版会発行、1926年発行、1997年覆刻、913号文書)。

【謝辞】

本稿の作成にあたり、関ヶ原の戦いの布陣図の所蔵関係機関として、岡山大学附属図書館池田家文庫、岐阜県図書館、大垣市立図書館、名古屋市蓬左文庫、西尾市岩瀬文庫、愛媛県立図書館伊予史談会文庫には各布陣図の閲覧に関して、それぞれ御高配に預かった。その点について謝意を表する次第である。

表１
『高山公実録』、『武家事紀』、『日本戦史 関原役』収載の布陣図に記載された家康方部将名の比較

布陣図に記載された部将名	『高山公実録』収載の布陣図（A類）	『武家事紀』収載の布陣図（B類）	『日本戦史　関原役』収載の布陣図（参謀本部図）
福島正則	○①最▲	○最	○最
田中吉政	○①最	○	○最
藤堂高虎	○①最▲	○最	○最
京極高知	○①最▲	○最	○最
蜂須賀至鎮	×	○最（注１）	×
有馬豊氏	○①最▲	○野	×
山内一豊	○①最▲	○野	○南
黒田長政	○②最▲	○最	○最
竹中重門	○②最	○最	×
加藤貞泰	×	○最	×
加藤嘉明	○②最▲	○	○最
金森長近	○②最▲	○	○
細川忠興	○②最▲	○	○最
織田長益（織田有楽）	○②最	○野	○
古田重勝	×	×	○
松倉重政	○②最	×	×
寺沢広高	×	○野	○
生駒一正	×	○野	○
松平忠吉	○③	○最	○最
井伊直政	○③	○最	○最
本多忠勝	○③	○最	○
徳川家康	○	○	○
池田輝政	×　▲	○南	○南
池田長吉	×	○南	×
浅野幸長	×　▲	○南	○南
有馬則頼	×	×	○南
徳永寿昌	×	○金	×
市橋長勝	×	○金	×
横井時泰	×	○金	×
西尾光教	×	○大	×
津軽為信	×	○大（注２）	×
水野勝成	○大	○大	×
水野宗十郎	○大	×	×
松平康長（戸田康長）	○大	○大	×
一柳直盛	×	○（注３）	×
中村一栄	×　▲	×	×
堀尾忠氏	×　▲	○留	×
筒井定次	×	○留	○最

（注１）「蜂須賀阿波守」と記載されているが、蜂須賀至鎮が阿波守に叙任するのは慶長９年である。
（注２）津軽為信の関ヶ原参陣については疑義を指摘する説もある。
（注３）布陣図における長松城のところに「一柳監物陣所」と記載されている。

【凡例】
①…一番備え、②…二番備え、③…三番備え
▲…家康の岡山本陣（勝山本陣）の周辺に布陣した諸将として名前が記されているもの（９月14日の在陣状況を指すと考えられる）
野…野上村に布陣。野上村は位置的には、家康本陣の桃配山より後方（東方）になる。
南…南宮山の毛利秀元などの軍勢への牽制として垂井町に布陣した。
金…金谷（金屋）河原（南宮山の南東）に布陣して、南宮山から退却した長束正家、安国寺恵瓊の軍勢を追撃した。この図では栗原村の横に３人の名前が記されている。
大…大垣城寄せ手。
留…家康の岡山本陣（勝山本陣）の留守居。
最…最前線に布陣した諸将。

表２
江戸時代に流布した関ヶ原の戦いの布陣図

絵　図　名	成立年	整理番号等	絵図の大きさ(㎝)	分類
【刊行本（史料）に収載された布陣図】				
『高山公実録』	嘉永３年 ～安政元年頃			Ａ類
『武家事紀』	延宝元年			Ｂ類
『武家事紀(津軽本)』				その他
【岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵の布陣図】				
〔関ヶ原合戦之図〕	寛延２年	Ｔ12－4	107.8×129.1	Ａ類
関ヶ原合戦ノ図		Ｔ12－19－1	82.4×61.7	Ｂ類
関ヶ原合戦ノ図		Ｔ12－19－3	121.5×188.1	Ａ類
関ヶ原御陣所絵図		Ｔ12－23	89.0×65.0	Ｂ類
関ヶ原御陣所之図		Ｔ12－26	134.5×109.5	Ｂ類
〔関ヶ原合戦図〕		Ｔ12－27	140.8×159.6	Ａ類
〔関ヶ原合戦図〕		Ｔ12－31	81.0×55.0	その他
関ヶ原戦図		Ｔ12－33	110.7×188.5	Ａ類
関ヶ原御陣場絵図面		Ｔ12－36	134.9×112.6	その他
濃州関ヶ原御合戦図	享保14年	Ｔ12－120	112.6×204.2	Ａ類
【岐阜県図書館所蔵の布陣図】				
濃州御勝山安楽寺御陣廊大概絵図		80－89－1	32.8×41.8	その他
慶長之役古戦場之図 (注1)		80－89－2	25.8×37.3	Ｂ類
慶長之役古戦場之図 (注2)		80－89－3	25.9×39.1	Ｂ類
濃州関ヶ原合戦図		Ｇ/204.9/セ	113.0×188.0	Ａ類
【大垣市立図書館所蔵の布陣図】				
関ヶ原合戦之図 (注3)		Ｏ－39－2－3	133.0×183.0	Ａ類
関ヶ原合戦図　東西両軍配陣図並両軍侍大将氏名貼付 (注4)		Ｔ39－2－28	84.5×82.3	Ａ類
濃州関ヶ原御闘戦東照大神君赤坂御陣営諸将陣取之図 (注5)	享保５年	Ｏ－39－2－1	163.5×99.0	Ａ類
『関ヶ原御合戦物語』のさし図 (注6)	宝永３年		27.4×20.5	Ｂ類
【名古屋市蓬左文庫所蔵の布陣図】				
関ヶ原戦場図		8－119	182×107	Ａ類
関ヶ原役布陣之図		36－163	79.5×75.4	Ｂ類
関ヶ原御陣場之図		図－354	198×124.6	Ａ類
関ヶ原之図		図－355	160.5×136.7	その他
関ヶ原古戦場図		図－356	207.5×140	Ａ類
関ヶ原御陣所之絵図		図－987	82×61.5	Ｂ類
関ヶ原戦図		中－618	80.9×56.3	その他
【西尾市岩瀬文庫所蔵の布陣図】				
関ヶ原戦陣之図		函番号139 番号15	137.1×81.6	その他
【愛媛県立図書館伊予史談会文庫所蔵の布陣図】				
濃州関ヶ原合戦之図 (注7)	宝暦９年	ホ～15～4	39.8×27.1	Ｂ類

（注１）木版多色刷。
（注２）同　上。
（注３）図録『決戦関ヶ原大垣博特別展』（決戦関ヶ原大垣博実行委員会、2000年、17頁）にカラー写真が掲載されている。
（注４）前掲・図録『決戦関ヶ原大垣博特別展』（18頁）にカラー写真が掲載されている。
（注５）前掲・図録『決戦関ヶ原大垣博特別展』（19頁）にカラー写真が掲載されている。
（注６）前掲・図録『決戦関ヶ原大垣博特別展』（22頁）にカラー写真が掲載されている。
（注７）『北藤録』巻之十三（愛媛県立図書館伊予史談会文庫所蔵）の中の挿入図。

表３
関ヶ原の戦いの布陣図について絵図の面積で大きい順にソートしたもの

絵　　図	成立年	長辺(cm)	短辺(cm)	面積(cm²)	分　類	所蔵先
関ヶ原古戦場図		207.5	140.0	29050	Ａ類	蓬左
関ヶ原御陣場之図		198.0	124.6	24670.8	Ａ類	蓬左
関ヶ原合戦之図		183.0	133.0	24339	Ａ類	大垣
濃州関ヶ原御合戦図	享保14年	204.2	112.6	22992.92	Ａ類	池田
関ヶ原合戦ノ図		188.1	121.5	22854.15	Ａ類	池田
〔関ヶ原合戦図〕		159.6	140.8	22471.68	Ａ類	池田
関ヶ原之図		160.5	136.7	21940.35	その他	蓬左
濃州関ヶ原合戦図		188.0	113.0	21244	Ａ類	岐阜
関ヶ原戦図		188.5	110.7	20866.95	Ａ類	池田
関ヶ原戦場図		182.0	107.0	19474	Ａ類	蓬左
濃州関ヶ原御闘戦東照大神君(後略)	享保５年	163.5	99.0	16186.5	Ａ類	大垣
関ヶ原御陣場絵図面		134.9	112.6	15189.74	その他	池田
関ヶ原御陣所之図		134.5	109.5	14727.75	Ｂ類	池田
〔関ヶ原合戦之図〕	寛延２年	129.1	107.8	13916.98	Ａ類	池田
関ヶ原戦陣之図		137.1	81.6	11187.36	その他	岩瀬
関ヶ原合戦図　東西両軍配陣図(後略)		84.5	82.3	6954.35	Ａ類	大垣
関ヶ原役布陣之図		79.5	75.4	5994.3	Ｂ類	蓬左
関ヶ原御陣所絵図		89.0	65.0	5785	Ｂ類	池田
関ヶ原合戦ノ図		82.4	61.7	5084.08	Ｂ類	池田
関ヶ原御陣所之絵図		82.0	61.5	5043	Ｂ類	蓬左
関ヶ原戦図		80.9	56.3	4554.67	その他	蓬左
〔関ヶ原合戦図〕		81.0	55.0	4455	その他	池田
濃州御勝山安楽寺御陣廊大概絵図		41.8	32.8	1371.04	その他	岐阜
濃州関ヶ原合戦之図		39.8	27.1	1078.58	Ｂ類	愛媛
慶長之役古戦場之図		39.1	25.9	1012.69	Ｂ類	岐阜
慶長之役古戦場之図		37.3	25.8	962.34	Ｂ類	岐阜
『関ヶ原御合戦物語』のさし図	宝永３年	27.4	20.5	561.7	Ｂ類	大垣

※上表では、刊行本（史料）に収載された布陣図３種は検討対象から除外した。
【凡例】上表における各布陣図（絵図）の所蔵先の略称については以下のようになる。
池田…岡山大学附属図書館池田家文庫
岐阜…岐阜県図書館
大垣…大垣市立図書館
蓬左…名古屋市蓬左文庫
岩瀬…西尾市岩瀬文庫
愛媛…愛媛県立図書館伊予史談会文庫

表４
家康方軍勢の布陣の構成

▼『庵主物語』（延宝２年）

一番備	福島正則・福島正之・藤堂高虎・田中吉政・有馬豊氏・京極高政（高知ヵ）・山内一豊・伊丹兵庫助・村越兵庫助・河村助左衛門・奥平貞治
二番備	黒田長政・竹中重門・金森長近・加藤嘉明・細川忠興・織田有楽（長益）・板倉（松倉ヵ）重政・小坂雄善・尼子（安孫子ヵ）善十郎・稲富（稲熊ヵ）市左衛門・兼松正吉
三番備	松平忠吉・井伊直政・本多忠勝・織田長孝・佐久間安政・佐久間勝之・船越景直

▼『黒田家譜』（元禄元年）

右軍	黒田長政・竹中重門・田中吉政・細川忠興・加藤嘉明・生駒一正等（注1）が北の山手に備えた
左軍	福島正則・藤堂高虎・織田有楽父子（注2）
中軍	松平忠吉・井伊直政・本多康俊（忠勝ヵ）（注3）
南宮山の押え	池田輝政・浅野幸長・駿河（中村一栄ヵ）・遠江衆（山内一豊・有馬豊氏・松下重綱ヵ）
大垣城の押え	水野勝成・津軽為信・西尾光教・松平康長等
赤坂陣所の留守	堀尾忠氏

（注１）先手である福島正則・藤堂高虎等は街道の左右を西向きに進撃。
（注２）田中吉政・細川忠興等は街道の右を西向きに進撃。
（注３）松平忠吉・井伊直政・本多忠勝は、その中筋を進撃。

▼『石田軍記』（元禄11年）

一番の備え	福島正則・京極高知・藤堂高虎・有馬豊氏・山内一豊・田中吉政
二番（の備え）	黒田長政・竹中重門・加藤嘉明・金森長近・細川忠興・織田有楽（長益）・松倉重政
三番（の備え）	松平忠吉・井伊直政・本多忠勝
御後備え	大須賀忠政・本多成重
南宮山の押え	池田輝政・浅野幸長
大垣城の押え	西尾光教・松平康長・津軽為信・水野勝成・榊原康政（注1）
赤坂陣所の留守	堀尾忠氏
多芸口	徳永寿昌・市橋長勝・横井時泰・横井孫右衛門・横井作左衛門が金屋河原に在陣

（注１）榊原康政は実際には徳川秀忠軍に従軍して中山道を進撃。

▼『関ヶ原御合戦物語』（宝永３年）

備え押しの次第（注1）

１陣	福島正則
２（陣）	細川忠興
３（陣）	加藤嘉明
４（陣）	黒田長政
５（陣）	田中直政（吉政ヵ）
６（陣）	井伊直政
７（陣）	松平忠吉
８（陣）	本多忠勝
９（陣）	京極高政（高知ヵ）
10（陣）	藤堂高虎
11（陣）	山内一豊
12（陣）	寺沢広高
13（陣）	有馬豊氏

（家康の）御馬御後	
	生駒正俊（一正ヵ）
	金森長近・金森可重
	蜂須賀至鎮
	織田有楽
	織田長孝
南宮山の押え	池田輝政・池田長吉・浅野幸長・山内一豊・駿河・遠江の多勢
大垣城の押え	中村一忠・中村一栄・水野勝成・津軽為信
曽根城（大垣城の押えと赤坂陣所の守り）	西尾光教
赤坂陣所の留守	堀尾忠氏・筒井定次
多芸口の押え	徳永昌時（寿昌ヵ）・市橋正綱（長勝ヵ）・横井時泰・横井孫右衛門・横井作左衛門等（宇多金谷川原に在陣）

※第１陣の福島正則から第13陣の有馬豊氏までは前線に布陣した、という意味と考えられる。
※第１陣などの数字表記がない生駒正俊（一正ヵ）から織田長孝までは、家康の桃配山陣所より後方に布陣した（つまり、後備え）、という意味と考えられる。
（注１）「備え」とは陣立ての意味であり、「押す」とは軍勢を進めるという意味なので、家康方の布陣を記したものであると解釈できる。

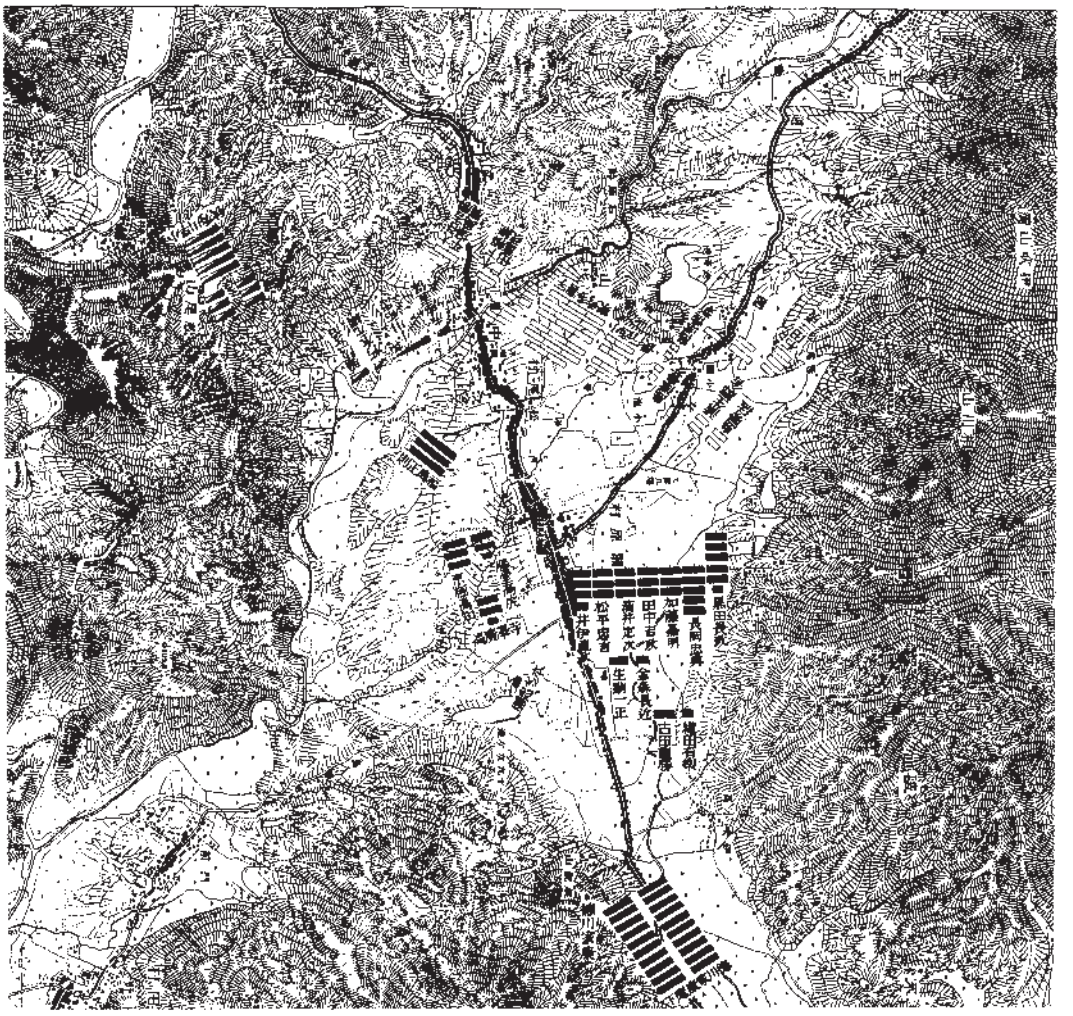
▼『関原軍記大成』（正徳３年）

一番	福島正則父子・藤堂高虎父子・田中吉政父子・生駒正俊（一正ヵ）・戸川政利（達安ヵ）・坂崎貞盛（宇喜多詮家）・桑山貞晴（元晴ヵ）・舎弟桑山一貞（貞晴ヵ）・大野治長
二番	細川忠興父子・黒田長政・加藤嘉明・織田有楽父子・竹中重門・筒井定次・松倉重正（重政ヵ）
三番	松平忠吉・井伊直政・本多忠勝・関一政・加藤直泰（貞泰ヵ）
遊軍	蜂須賀至鎮・稲葉貞道（貞通ヵ）父子・遠藤慶隆・小出吉辰（秀家ヵ）・亀井政直（茲矩ヵ）・寺沢広高等
南宮山・栗原山の押え	池田輝政父子・浅野幸長・山内一豊・有馬則頼父子・金森長近父子・中村一栄・一柳直盛・水野清忠（守信ヵ）・鈴木重慶（重時ヵ）（垂井山の東の方に在陣）
大垣城の押え	西尾忠政（光教ヵ）・水野勝成・津軽為信・松平康長等（曽根の近辺に在陣）
赤坂陣所の留守	堀尾忠氏
多芸の押え	徳永寿昌父子・市橋長勝・横井時泰・横井孫右衛門・横井佐（作ヵ）左衛門等（金谷河原に在陣）

▼『大垣藩地方雑記』（弘化元年）

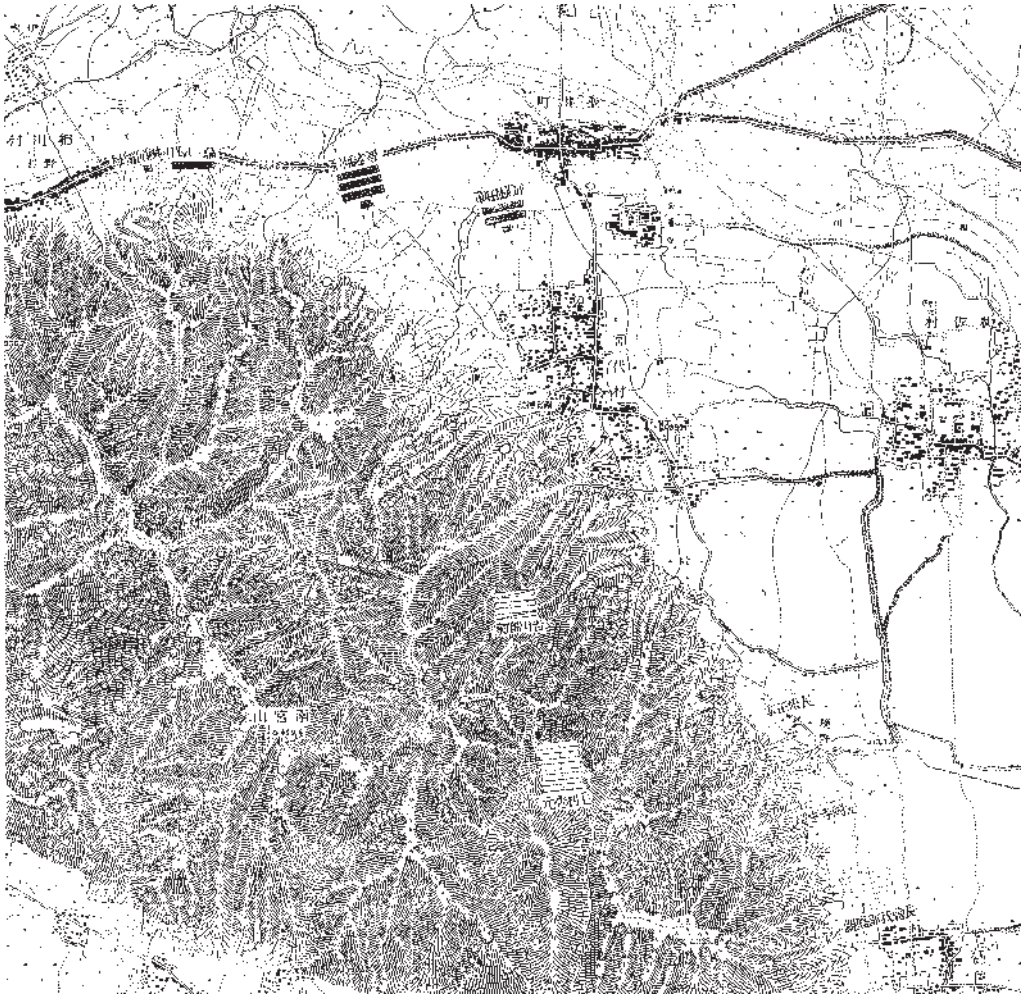
一番備	福島正則・福島正之・京極高知・藤堂高虎・有馬豊氏・山内一豊・田中吉政 目付…伊丹兵庫頭・村越兵庫頭・河村助左衛門・奥平貞治
二番備	黒田長政・竹中重門・加藤嘉明・金森長近・細川忠興・織田有楽（長益）・松倉重政 目付…小坂雄善・我孫子（安孫子ヵ）善十郎・稲能（稲熊ヵ）市左衛門・兼松正吉
三番備	松平忠吉・井伊直政・本多忠勝・織田長孝 目付…佐久間安政・佐久間勝之・船越景直

図１
参謀本部編纂『日本戦史　関原役（附表・附図）』に収載されている「關原本戰之圖」



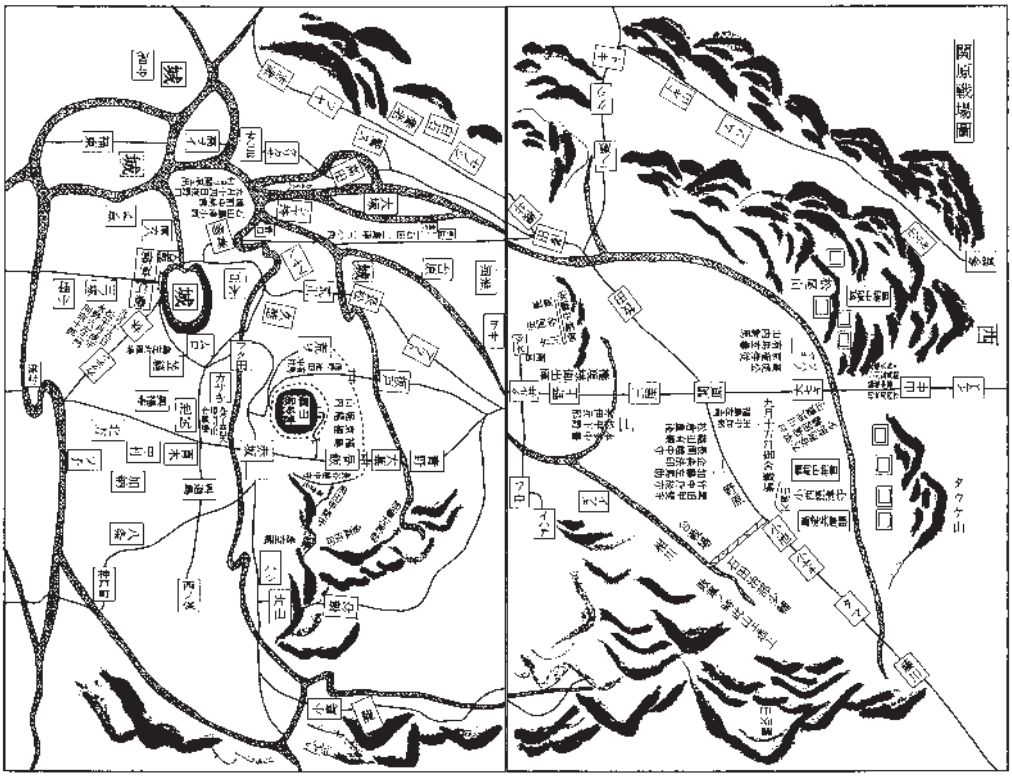
「關原本戰之圖」部分（両軍が布陣した前線付近）

※参謀本部編纂『日本戦史　関原役（附表・附図）』（初版は明治26年〔1893〕刊行）に収載されている「關原本戰之圖」が、『歴史群像』2011年２月号（学研パブリッシング発行、2011年）の付録として復刻されているので、そこから引用した。なお、「關原本戰之圖」は大きいので、両軍が布陣した前線付近と南宮山付近を、それぞれ部分的に示すこととする。



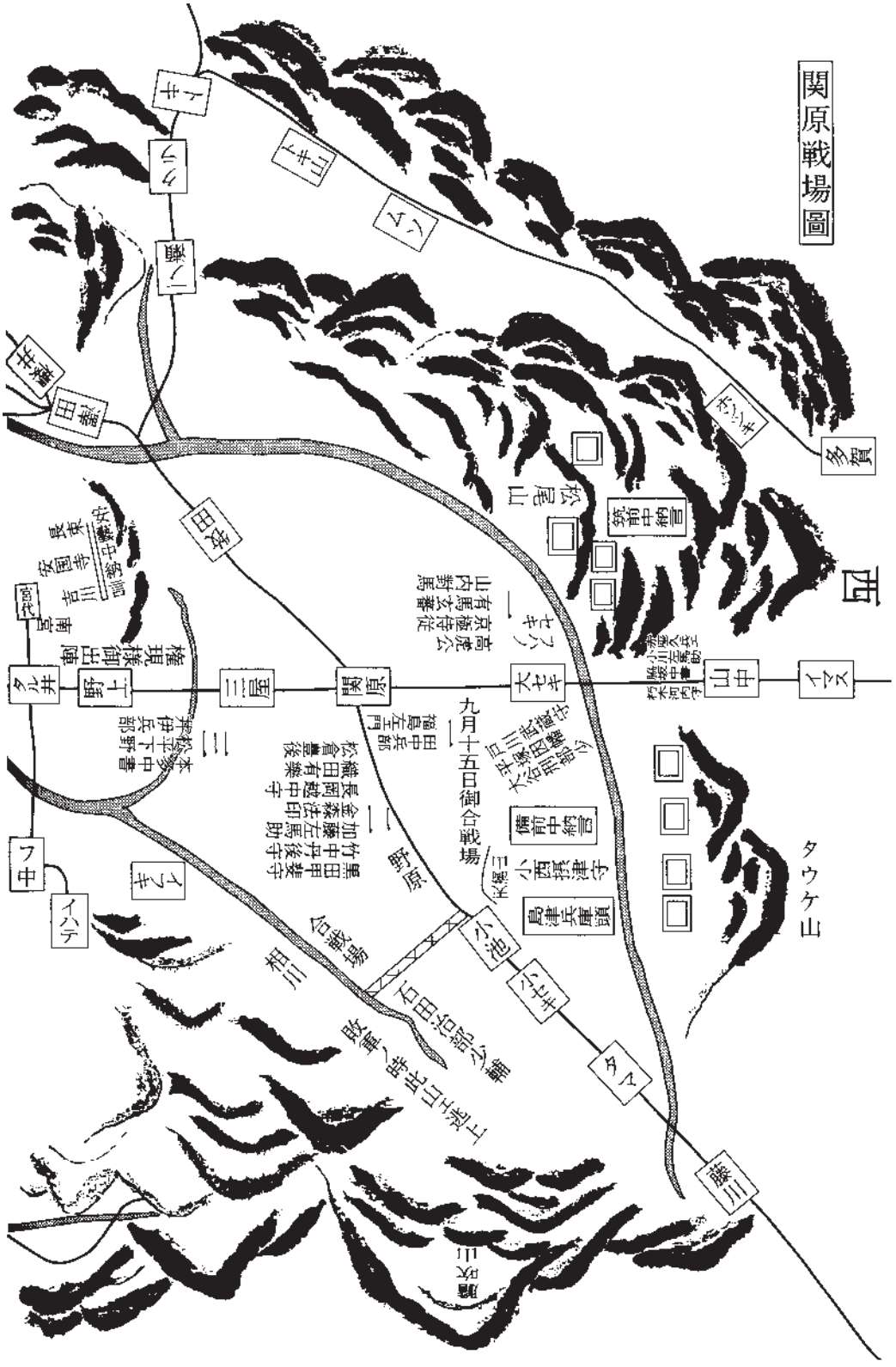
「關原本戰之圖」部分（両軍が布陣した南宮山付近）

図２
『高山公実録』収載の布陣図（A 類の布陣図）



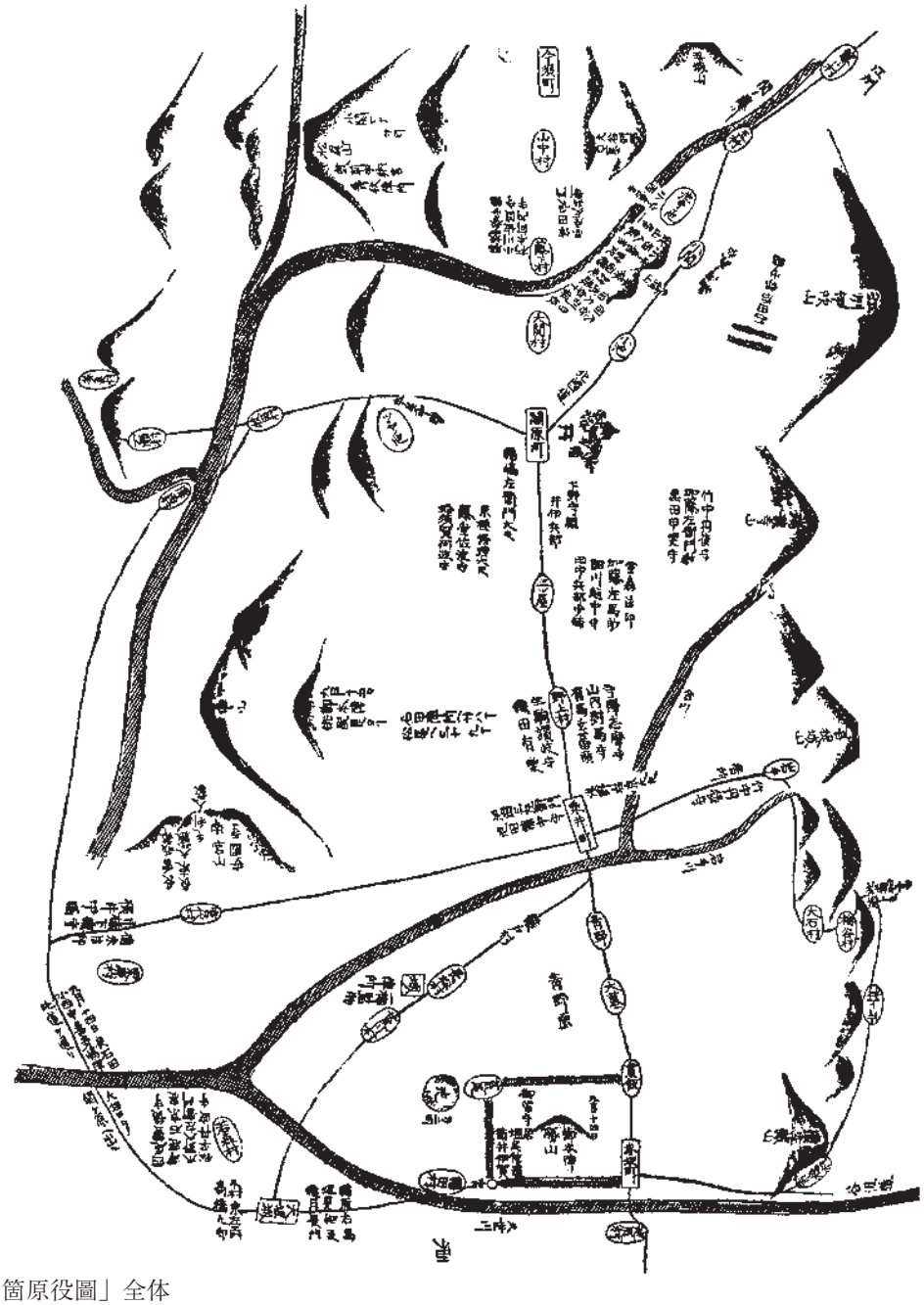
「関原戦場圖」全体

※上野市古文献刊行会編『高山公実録』〈藤堂高虎公伝〉上巻（清文堂出版、1998年、220～221頁）より引用。



「関原戦場圖」部分（拡大）（両軍が布陣した前線付近）

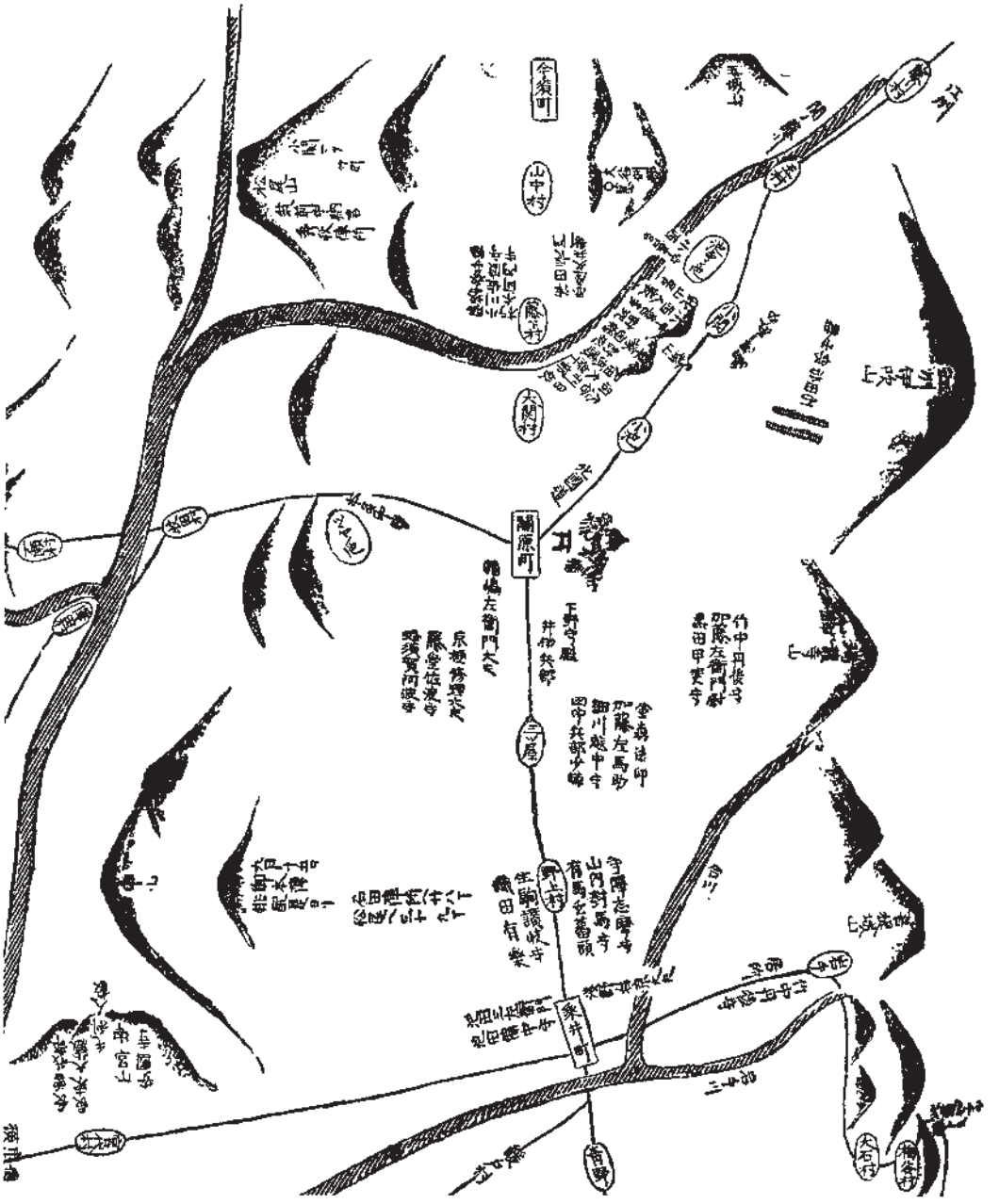
図３
『武家事紀』収載の布陣図（B 類の布陣図）



「關箇原役圖」全体

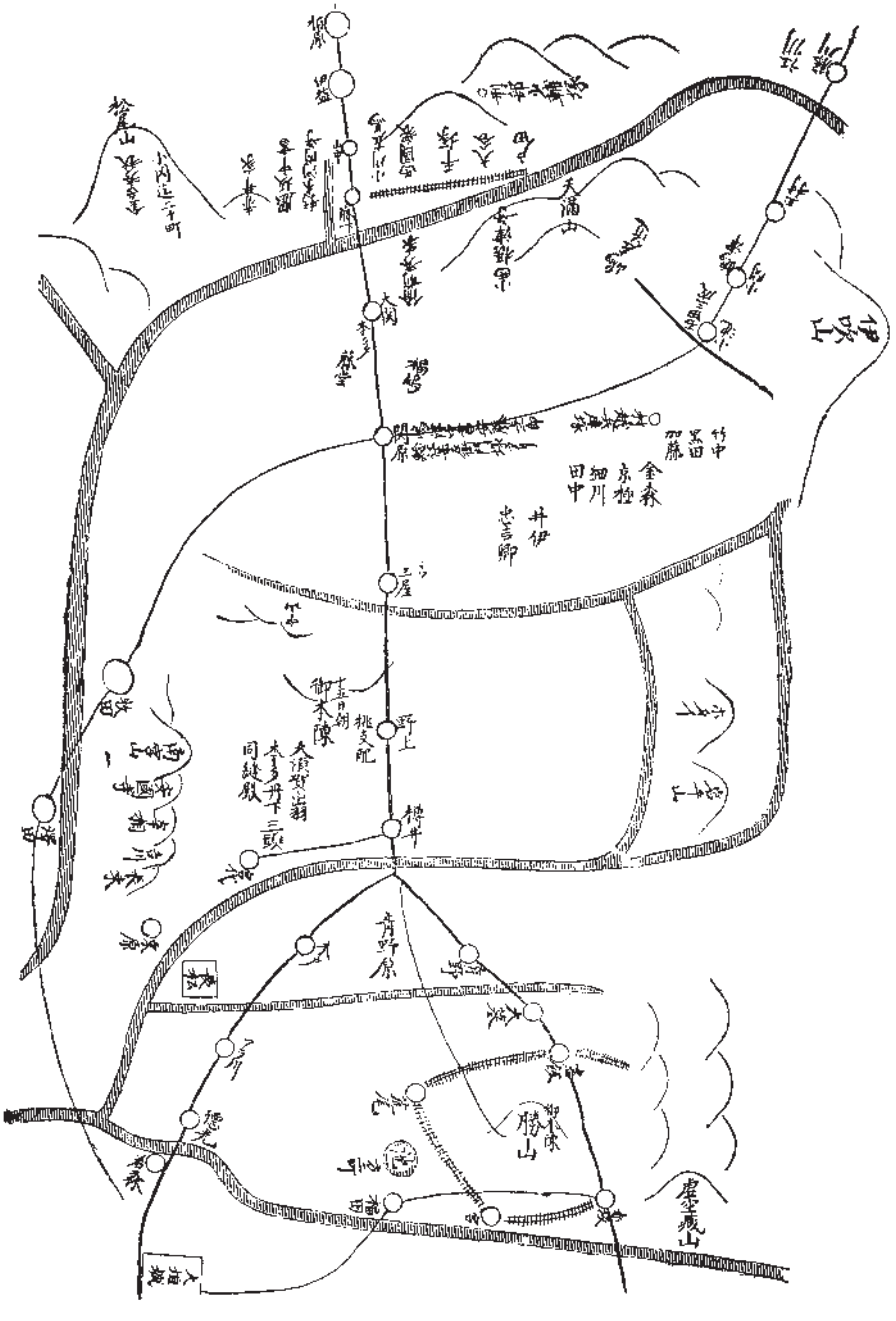
※山鹿素行著『武家事紀』中巻（原書房、1982年復刻〔原本は1916年発行〕、417頁）より引用。

關　箇　原　役　圖



「關箇原役圖」部分（拡大）（両軍が布陣した前線付近）

図４
「關箇原役圖（津軽本）」（その他の分類の布陣図）



「關箇原役圖（津軽本）」全体

※山鹿素行著『武家事紀』中巻（原書房、1982年復刻〔原本は1916年発行〕、418頁）より引用。